

# 論文内容の要旨

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻人間科学プログラム  
2021年度入学  
(学生番号) 211-700078-8

ふりがな (氏名) もりだいら 森平 じゅんじ 准次

## 1. 論文題目

心理療法における他者の経験と否定のはたらきを捉える視座

## 2. 論文要旨

本研究は、心理療法において他者の経験と否定のはたらきがクライアントを変容させる機序を検討するための視座を開くことを目的とした。

第1章では他者の経験についての論考を整理した。M. Merleau-Ponty, 木村敏, 西田幾多郎, 和辻哲郎, E. Lévinas, の論考を取り上げ、他者の経験における自他未分化で融合的な経験から自他が分化する契機を視座に据えた。

次に、生起し独立した存在としての自己の基盤を発達的な観点から捉えた。自己が自己として独立した存在であるには身体という契機が重要な意味をもっていることを Merleau-Ponty や市川浩の論考から確認した。また、M S. Mahler の分離个体化理論を取り上げ、発達にともなって養育者から独立した行動がとられていく過程について確認した。

そして心理療法における他者の経験について、スキーマや転移の視点から検討した。認知行動療法の文脈から発展したスキーマ療法では、対人認知のスキーマを他者の経験の基底に想定する。転移は、発達上の重要な他者のイメージをセラピストに映し出してみるという S. Freud が想定した概念から発展してきたが、後にセラピストとクライアントの関係性の中で生起するものとして考える研究者も現れ、本研究では T. H. Ogden の「分析の第三主体」の概念等を取り上げた。また C. G. Jung の分析心理学においては、より根源的で原初的な元型的イメージの生成を視座に含んでいる。Jung はセラピストとクライアントの無意識を含めた人格的なかわりにより変容が起こると錬金術をモチーフに論考している。

これらの議論から、クライアントが表象として経験する転移の次元から、セラピストとクライアントの未分化で融合的な経験の次元までを視座に捉えた。

第2章第1節では、否定のはたらきについて、まず表象に対する判断としての否定を概観した。次に、かかわらないことや切断すること、差別や排除、暴力、といった行為そのものに内在している否定を論じた。さらに W. G. F. Hegel の視座を取り上げ、分節化によって存在そのものが立ち現れる契機としての否定を確認した。このように否定を、判断としての否定、行為としての否定、存在の本質としての否定、の3つの位相から整理した。

第2節で、心理療法がかかわる否定の諸相を概観した。クライアントが心理療法に来談する端緒となる症状等の現れは、クライアントにとっての否定的な在りようである。精神分析が提起した防衛機制の概念等からは、症状を維持するメカニズムを否定のはたらきとして確認できる。セラピストとクライアントのかかわりにみられる否定として、中断等をまとめた。また、分析心理学の概念であるアニムスを否定という心理学的動きのイメージとして捉える研究を確認した。このように心理療法における否定の4つの側面を取り上げた。

第3節では、否定を変容の契機として捉えた。第1項でイニシエーションにおける否定を確認した。第2項で否定的な症状や状況を、心理療法を受療する変容への端緒として捉えた。第3項で、認知行動療法や深層心理学的心理療法における心理療法的かかわりに否定が孕まれていることを確認した。第4節では、肯定的な変化を前提としての否定では否定が十分に立ち現れてこないこと、それゆえ「否定の否定」を視座に含めるべきことを検討した。

第3章では、第1章と第2章の議論を総括し、他者の経験と否定のはたらきを捉える視座を、それぞれ2次元の軸で構成した。他者の経験については「否定と肯定」「分離と融合」を、否定のはたらきについては「自己と他者」「表象と経験」を、それぞれの二つの軸として想定した。これによって、心理療法過程の時間の経過に伴って、クライアントの他者の経験と否定のはたらきがどのような位相をたどるのかを示すことができると考えられた。

また、第3章第3節では、第4章から第7章で取り上げる事例研究について、その目的と方法を説明した。事例研究では、筆者の心理療法の自験例を取り上げ、それぞれに見られた他者の経験と否定のはたらきを抽出し検討することを目的とした。本研究の事例研究では、分析ツールとして大谷尚の開発した SCAT を用いた。SCAT では、取得した言語データをセグメント化し、SCAT のマトリクス・フォームによってコード化し、ストーリーラインを描き、理論記述を行う。本研究のようにリサーチ・クエンションを明確に設定した研究にとって、心理学的な事象について概念化を行い、より純粋な形で検討できる方法である。また事例においてクライアントの語りや抽象化されるため、クライアントの個人情報や保護するうえでも有用である。一方、SCAT を用いて概念化することにより、事例研究で豊かに検討することのできる様々な事象が捨象されることになる。それを補うため、事例の概要を簡単に記述し、またその事例における特徴的なエピソードを取り上げることにした。それにより、事例の生き生きとした心理学的

動きや変容の契機についてもみていくことができると考えた。

第4章で取り上げた事例Aでは、クライアントに、他者の視点に映る否定的なものとしての自己、という心理学的テーマが見出された。心理療法の過程において、自己が徹底的に否定されるという幻聴様の経験、そしてそのような徹底的な否定の中に在って自己に対する支持的・肯定的なコミットが語られた。クライアントは心理療法終結のころ、否定の経験を潜り抜けることによって生起した主体性と、それによる身体感覚や感情体験への気づき、を語った。

第5章で取り上げた事例Bでは、クライアントには、自己の存在の基盤が脆弱であり、他者との間に没入することができない、という心理学的テーマが見出された。自他の間に没入することへの否定は、自己の内界へのコミットに対する否定と連動していた。心理療法はクライアントの内的な在りようが表出しやすく、クライアントにとって危機的なものとして経験されうる。心理面接でクライアントは、対象の非分節化や身体的な揺れ、めまいや視界の不明瞭化を経験し、それはセラピストにも経験された。筆者はこれをセラピストとクライアントの間への没入であり、自他の未分化で融合的な経験の現われであると考察した。このときこの経験を対象化し言語化する否定によって、対象の再分節化や自己の存在の安定化が生起した。没入とその否定はクライアントの自己の存在感を強化し、自他の間や自己の内界へのより自由なコミットが可能となった。

第6章で取り上げた事例Cのクライアントには、他者への否定という心理学的テーマが見いだされた。クライアントは自己の周囲の他者を否定的なものとして経験していたが、その他者は特定化されず、個別の具体的な他者の相をとらず一般化されていた。心理療法ではセラピストがクライアントの認知や行動を検討することを促した。これはクライアント自身が否定の対象となり、自己が他から分節化され、またクライアントが他者を分節化していく経験となり、分節化する主体としての在りようを生起させた。この過程を経て、クライアントは適応的な感覚を得て、主体的な生き方への志向性が生起した。

第7章で取り上げた事例Dでは、ひきこもりを呈するクライアントに、境界を創り他者とのかわりから閉じこもるという否定と、それによって自らが安心して存在できる世界を創造する、という心理学的テーマを見出した。また、クライアントの軽度の自己臭恐怖症状や他者への暴力性を否定として捉えた。暴力は表現することを否定されたが、明瞭に他に向かう否定の感情をクライアントに認識させた。クライアントは暴力的な在りようを自己の表象に認め、否定的なものとしての自己に直面した。また、面接において沈黙するという対話の否定を経験し、それを通して、自他未分化な雰囲気のような存在感に触れる契機となった。クライアントはこれらの否定を通じて自己にコミットし、それにより主体的な生き方を模索できるようになった。

第8章では、第4章から第7章までの各事例から抽出した他者の経験と否定のはたらきについて、その概要を並置し検討した。各事例の心理療法過程は、他

者の経験に否定のはたらきがみられること、否定のはたらきによって他者の経験がより深まることを示唆していた。また、第3章で作成した2次元の軸に、他者の経験と否定のはたらきをそれぞれ、心理療法の展開という時間軸に添ってプロットし、時間的な変容の動きを理解した。それぞれの事例を並置し、それぞれの経験の位相の差異を捉えた。

そして心理療法において生起する他者の経験と否定のはたらきについて、以下の要点を包括的に捉えた概念図として示した。クライアントとセラピストの間には、自他未分化な融合的な場が想定される。そこにおいて否定の契機によりセラピストとクライアントはそれぞれに独立した存在として分化していく。次に、クライアントによるセラピストの表象の否定、セラピストとかわること

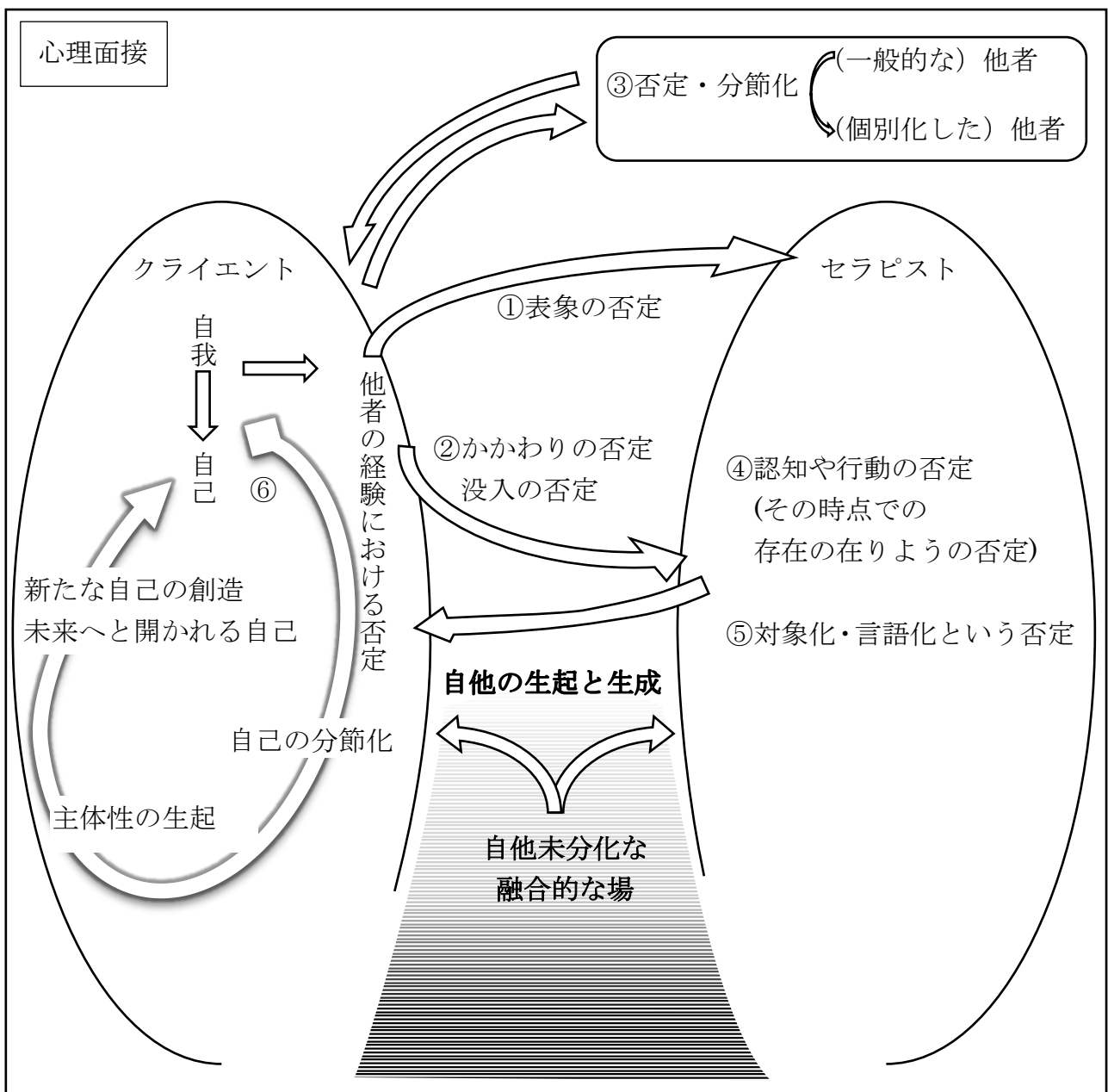


図 心理療法における他者の経験と否定のはたらきの概念図

や関係に没入することの否定、も描かれる。クライアントが語る日常生活における他者の否定や他者に否定される経験は、それを通してクライアントにとっての他者や否定の変容の契機となりうる。セラピストの、クライアントの認知や行動の検討というクライアントの在りようの否定や、クライアントやセラピスト自身の経験についての言語化・対象化という否定、という契機も捉える。心理療法のなかでのセラピストの否定という契機は弁証法的にはたらき、クライアントの自己の分節化や主体性が生起し、自己の在りようとして新たな自己イメージや主体的な自己が開かれることを示した。

本研究の成果として、心理療法における他者の経験と否定のはたらきについての多様な次元や位相を包括的に示し、それらを捉える視座を開いたことを挙げる。また限界として、他者論や否定論の広大な範囲で扱えた先行研究が限られてしまっている点、一つの理論体系からの掘り下げが不足している点、を挙げる。さらに自験例は思春期から青年期にかけての事例で、一定以上の面接への動機と経験を言語化する能力や、自我機能としても一定以上の強さをもっていた。したがって、異なる発達段階や、深い病態のクライアントに対して本研究で得られた視座からどのように理解ができるかについては、検討の余地がある。これらについては、今後の課題としたい。

# Abstract

The School of Graduate Studies,  
The Open University of Japan

MORIDAIRA, Junji

A Perspective on the Experience of Others and the Mechanisms of  
Negation in Psychotherapy

Psychotherapy is fundamentally imbued with the momentum of others and negation. The purpose of this study was to open a perspective for examining how the experience of others and the function of negation transform clients in psychotherapy. In this study, the other is “someone other than oneself.” In psychotherapy, clients have a variety of psychological experiences with therapists, and clients narrate their experiences with others in their daily lives. In this study, the term negation is used to include the negation of things, occurrences, and states, as well as unfavorable experiences for the subject, and moments of segmenting existence.

In Chapter 1, I summarized the discussion of the experience of the other, including discussions on the works of M. Merleau-Ponty, Kimura Bin, Nishida Kitaro, Watsuji Tetsuro, and E. Lévinas, and I grasped that the differentiation of self and others arises from the undifferentiated and fused relationship with others.

Next, the basis of the self as an emergent independent being is examined from a developmental perspective. From the works of Merleau-Ponty and Ichikawa Hiroshi, I established that the body is an important factor in the independent existence of the self as a self. I also explored M. S. Mahler’s separation-individuation theory and established the process by which children’s behavior becomes independent of their caregiver as they develop.

The experiences of others in psychotherapy were examined in terms of schema and transference. In schema therapy, which was developed in the context of cognitive-behavioral therapy, the schema of interpersonal cognition is the basis of the experience of others. The concept of transference has evolved from Freud's assumption that the image of the developmentally significant other is projected onto the therapist to transference as something that occurs in the relationship between the therapist and client, such as T. Ogden's concept of "the analytic third" explored in this study. C. G. Jung's analytical psychology includes the emergence of fundamental and primordial archetypal images within its perspective. Jung also uses alchemy as a motif to argue that transformation occurs through interaction of personalities, including the unconsciousness of the therapist and client. From these discussions, my perspective on transference was that the client experiences not only the projection of a representation of the other but also the undifferentiation and fusion between the therapist and client.

In Chapter 2, Section 1, I reviewed the function of negation as a judgment of representations. Next, I discussed the negation inherent in behaviors themselves, such as being uninvolved, cutting off, discrimination and exclusion, violence, and so on. Furthermore, I took up W. G. F. Hegel's perspective, who has confirmed negation as a moment for existence to emerge through segmentation. Thus, I organized negation into three phases: negation as judgment, negation as action, and negation as the essence of existence.

In Section 2, I reviewed various aspects of negation in psychotherapy. Symptoms that trigger clients to undergo psychotherapy are negative states. From the concept of defense mechanisms proposed by psychoanalysis, I argue that the mechanism of maintaining symptoms is a mechanism of negation. Interruption of the relationship between the therapist and the client was summarized as a form of negation. Additionally, I found studies that view animus, a concept in analytical psychology, as an image of the psychological movement of negation. Thus, four aspects of negation in psychotherapy are discussed.

Finally, I considered negation as a moment for transformation. First, I ascertained the negation in the initiation. Next, negative symptoms and situations were considered as triggers for transformation to undergo psychotherapy. Furthermore, I confirmed that negation is inherent in psychotherapeutic involvement in cognitive-behavioral therapy and depth psychotherapy. I also suggested the necessity of including "negation of negation" in the perspective on the function of negation in psychotherapy,

because negation based on the assumption of positive change does not fully define negation.

In Chapter 3, I summarized the discussions in Chapters 1 and 2 and organized each of the experiences of others and the workings of negation on two axes. “Negation and positive” and “fusion and separation” for the experience of the other, and “self and other” and “representation and experience” for the mechanism of negation, were assumed as the two axes in this study. This allowed us to show how clients' experience of the other and the mechanisms of negation varied over time in the psychotherapeutic process.

In Chapter 3, Section 3, I explain the purpose and methods of the case studies discussed in Chapters 4–7. The case studies utilize the author's own psychotherapy cases to extract and examine the experience of others and the mechanisms of negation that were observed in each case. In these case studies, the Steps for Coding and Theorization (SCAT) developed by Otani Takashi was used as an analytical tool, in which the linguistic data collected were segmented and coded by SCAT matrix Form, storylines were drawn, and theoretical descriptions were made. For a study with a clearly defined research question like this study, SCAT allows the conceptualization and examination of psychological phenomena in more genuine form. It is also useful in protecting clients' personal information, because clients' narratives are abstracted in the case study. In contrast, conceptualization with SCAT omits various psychological phenomena that can be extensively examined in case studies. To compensate for this, a brief overview of the case study is provided, and characteristic episodes in the case study are highlighted. This method allows us to gaze into vivid psychological movements and moments for transformation in the case studies.

In Case A, discussed in Chapter 4, the client's psychological theme was revealed as “self as a negative reflected in the perspective of others”. During psychotherapy, the client described the auditory hallucination-like experience of a thorough negation of the self and a supportive and positive commitment to the self amid such thorough negation. At the end of the psychotherapy session, the client narrated the subjectivity that arose through the experience of negation and her awareness of the bodily sensations and emotional experiences.

In Case B, discussed in Chapter 5, the psychological theme was that the client had a fragile base of existence of the self and her inability to involve in others. The negation of immersion between the self and others was linked to a



negation of commitment to her inner world. Psychotherapy can be experienced by client as a crisis for their existence, as client's inner life is easily expressed. During psychotherapy interviews, the client experienced de-segmentation in object recognition, trembling, dizziness, and blurred vision, which were also experienced by the therapist. The author considered this to be an immersion between the therapist and client, a manifestation of the undifferentiation and fusion between the self and the other. The negation of objectifying and verbalizing this experience generated the re-segmentation of the object and the stabilization of the self's existence. Immersion and its negation strengthened the client's sense of self-presence, allowing for a freer commitment between the self and others as well as to the inner world of the self.

In Chapter 6, Case C, the client's psychological theme was the negation of the other. The client experienced others around him as negative, but the others were not specified and were generalized without taking on an individual, specific form. In psychotherapy, the therapist urged the client to examine his cognitions and behaviors. In this experience the client himself became an object of negation, the self was segmented from the other, and the client segmented the other, giving rise to a way of being the subject of segmentation. Through this process, the client learned to adapt to their surroundings and became oriented toward a self-directed way of life.

In Chapter 7, Case D, the psychological theme of negation, which creates boundaries and closes oneself off from others, was found in the client's state of withdrawal. In withdrawing, the client created a world in which they felt safe. The client's mild self-odor phobia and violence toward others were also considered as negation. The expression of violence was denied, but the client was made aware of the effect of negation toward others. The client recognized a violent way of being in the representation of the self and faced the self as a being that contained negation. In addition, the client experienced a negation of dialogue by being silent during the interview, and through this, he was exposed to a sense of existence that resembled an atmosphere of undifferentiated self and others. Through these negations, the client committed to the self, enabling him to seek a self-directed way of life.

In Chapter 8, I juxtaposed and examined the experience of the other and the workings of negation extracted from each of the cases in Chapters 4—7. The psychotherapeutic process in each case suggested that the mechanisms of negation were found in the experience of the other, and that the experience of the other was deepened by the mechanism of negation. In addition, I plotted

the experience of the other and the works of negation on the two-dimensional axis presented in Chapter 3, along the time axis of the psychotherapeutic process, to understand the transformation. By juxtaposing and looking over each case study, I captured the different phases of each client's experience. Each client went through different phases of the experience of others and the workings of negation. However, by the end of psychotherapy, the clients were talking about the seed of their independence to live in their own way. It could be said that the experience of others and the mechanism of negation in psychotherapy enabled the clients to formulate more of their own selves.

The following comprehensive conceptual diagram (Figure) was developed for the experience of others and the mechanisms of negation that occur in psychotherapy. A fusion-like place where the self and others are undifferentiated is assumed to exist between the therapist and client. The therapist and client are differentiated as independent entities based on the moment of negation. The client's negation of the therapist's representation, the client's negation of being involved with the therapist, and the client's negation of being immersed in the relationship with the therapist are depicted. The client's negation of the other and the experience of being denied by the other in daily life can be a moment for the client's transformation of the other and negation. It also captures the therapist's negation of the client's state of being in terms of examining the client's cognition and behavior, and the negation of verbalizing and objectifying the client's and therapist's experiences. I argued that therapists' negation in psychotherapy works dialectically, that clients' segmentation of self and subjectivity would arise, and that a new self-image and subjective self are revealed as the client's state of self.

As an outcome of this study, I have comprehensively grasped the various dimensions and phases of experiences of the other and the mechanisms of negation in psychotherapy and have proposed a novel perspective for understanding these aspects. One limitation of this study is the limited number of previous studies that could be addressed. This was due to the vast range of theories on the experience of others and the workings of negation. Another is a lack of in-depth research from a single theoretical system. Furthermore, the psychotherapy cases involved adolescents and young adults who had a certain level of motivation, ability to verbalize their experiences, and strength as an ego function. Therefore, it is necessary to further examine how the perspectives gained in this study can help us understand clients at different developmental stages and those with deeper pathologies. These

issues should be addressed in future studies.

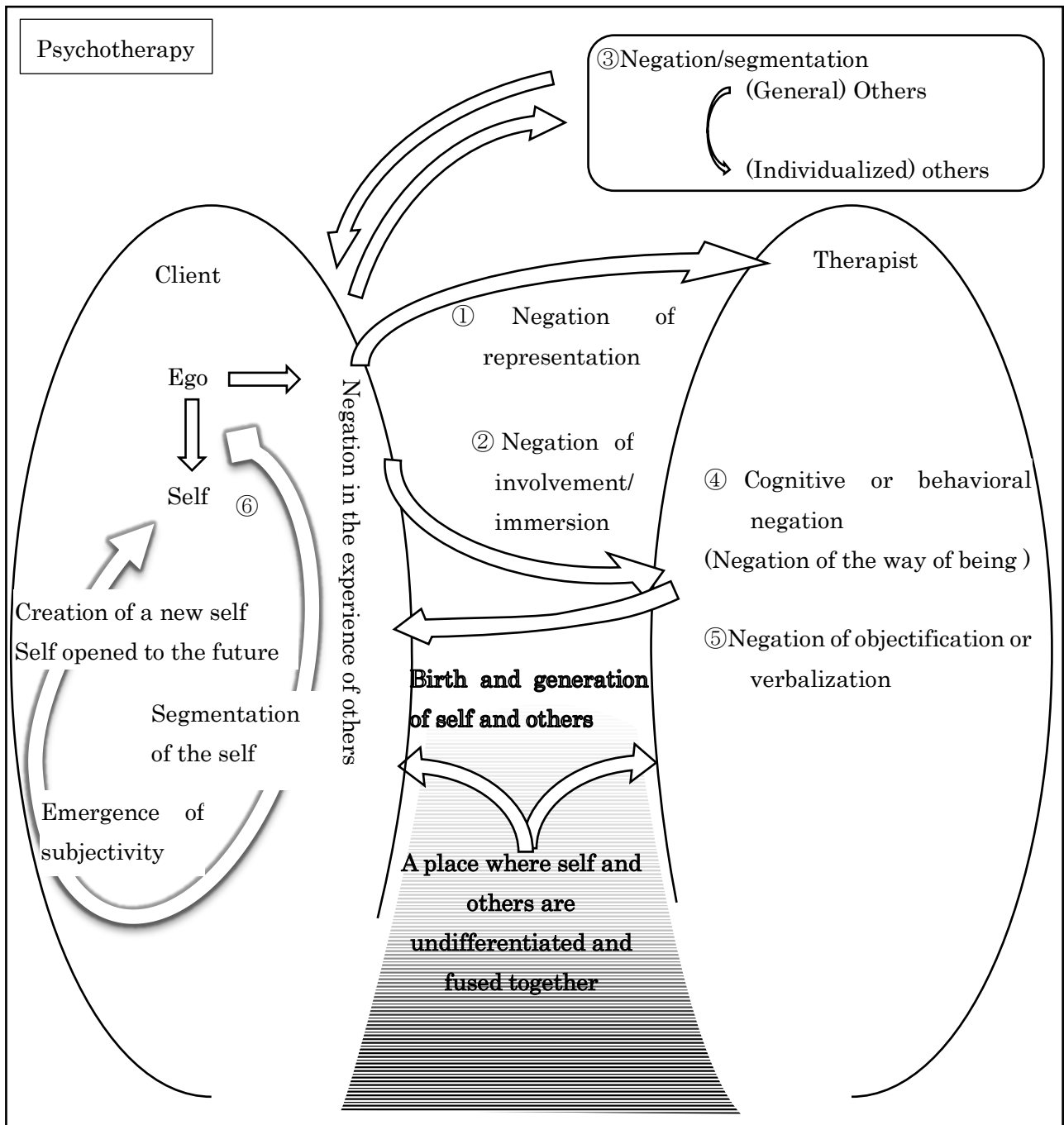


Figure: Conceptual diagram of the experience of others and the negation mechanism in psychotherapy

# 博士論文審査及び試験の結果の要旨

## 学位申請者

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻人間科学プログラム  
氏名 森平 准次

## 論文題目

心理療法における他者の経験と否定のはたらきを捉える視座

## 審査委員氏名

- ・主査（放送大学教授 博士（人間科学）） 橋本 朋広
- ・副査（放送大学教授 博士（教育学）） 大山 泰宏
- ・副査（放送大学教授 博士（文学）） 魚住 孝至
- ・副査（大阪公立大学教授 博士（学術）） 川原 稔久

## 論文審査及び試験の結果

以下、1で本論文の構成を確認し、2で本論文についての評価と審査結果を述べる。

### 1. 本論文の構成

序論では、他者経験を通しての自他の生起が心理療法における変容の重要な契機であること、自他の生起には否定という契機が重要であることが指摘され、心理療法においてこれら二つの契機がクライアントを変容させる機序を捉える視座を切り開くのが本論文の主題である、と述べられる。

第1章では、先行研究における他者経験についての議論が整理される。第1節では、M. Merleau-Ponty、木村敏、西田幾多郎、和辻哲郎、E. Lévinasの自己論や他者論が検討され、他者経験には主客が分離する以前の自他未分化な融合的経験の位相があること、そのような経験の位相から自他が生起するためには否定の契機が重要であることが示される。第2節では、Merleau-Pontyや市

川浩の身体論的発達論、M. S. Mahler の分離個体化理論が検討され、分離し独立した自他の経験は、自他未分化な融合的経験から自他が生起する動きを基盤としつつ、表象機能の発達を媒介として成立することが示される。そして、第3節では、心理療法の領域においてなされている他者経験に関する議論を検討し、認知行動療法の領域では、独立した他者の表象が主要な関心になっていること、他方精神分析の転移論では、初期には、独立した他者の表象が主要な関心になっていたが、M. Klein や T. H. Ogden の議論に見られるように、近年は自他未分化な融合的経験からの自他の生起が重視されるようになってきていること、C. G. Jung の分析心理学では、自他未分化な融合的経験の位相におけるセラピストとクライアントの相互変容が重視されることが示される。

第2章では、先行研究における否定についての議論が整理される。第1節では、人間の経験における否定のはたらき一般について、判断としての否定、行為としての否定、存在分節としての否定といった観点から整理がなされる。第2節では、心理療法において生じる否定について、主訴としての否定、防衛機制としての否定、関係の否定、没入の否定といった観点から整理がなされる。第3節では、心理療法的な変容に関わる否定について、イニシエーションにおける否定、認知・行動の修正としての否定、主体を生成する否定といった観点から整理がなされる。そして、第4節では、否定が変化の達成（肯定）をもたらす点を確認しつつ、しかし本来的な否定は、肯定の一契機にとどまるのではなく、肯定の一契機としての否定をさらに否定していく動きであり、その意味で「否定の否定」に注目することが重要であると論じられる。

第3章・第1節と第2節では、第1章と第2章の議論をふまえ、他者経験の位相を捉えるために「否定－肯定」「融合－分離」の2軸が、否定のはたらきの位相を捉えるために「自己－他者」「表象－経験」の2軸が抽出され、それによって、心理療法過程における他者経験と否定のはたらきの位相変化を捉える枠組みが提示された。そして、第3節では、心理療法における他者経験と否定のはたらきを捉える視座を切り開くために、実際の事例をもとに事例研究を行うことが述べられ、他者経験と否定が中心的な心理学的課題となる思春期・青年期の事例を取り上げること、事例における他者経験と否定のはたらきを概念的に捉えるため大谷尚(2008)による SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いることが論じられた。

第4章から第7章では、各章1事例の事例研究がなされた。事例研究では、まず SCAT を用いて他者経験と否定のはたらきに関するストーリーラインと理論記述が行われ、その後、それを手がかりとしながら、事例の転換点となるエピソードに注目し、その多義的な意味が考察され、最終的に両者の知見を統合して事例における他者経験と否定のはたらきの特徴が記述された。

そして、第8章・第1節では、各事例の考察をふまえ、「否定－肯定」「融合－分離」の座標平面上に他者経験の位相変化が、「自己－他者」「表象－経験」の座標平面上に否定のはたらきの位相変化がプロットされ、第2節では4事例における他者経験の比較検討、第3節では4事例における否定のはたらきの比

較検討がなされた。

それによれば、他者経験に関して、事例 A では、融合的な位相における否定的な他者経験を通して分離した自他の肯定へ開かれた。事例 B では、融合的な他者経験への入れなさゆえに肯定的他者表象と否定的他者表象の間で逡巡していたのが、融合的な他者経験の分節化を通して、分離した自他の肯定へ開かれた。事例 C では、分離した位相での否定的な他者表象の経験から、融合的な他者経験のなかでの自己省察の繰り返しを経て、分離した自他の肯定へ開かれた。事例 D では、分離した他者経験と融合的な他者経験の往来を積み重ねながら、分離した自他の肯定へ開かれた。

また、否定に関して、事例 A は、表象としての自己への否定から他者の表象の否定を経て、より根源的な経験の位相における自他分節としての否定へ開かれた。事例 B は、根源的な位相における自他の受動的な否定から、表象としての他者への否定を経て、根源的な経験の位相における自他分節としての能動的な否定へ開かれた。事例 C では、表象としての他者への否定から、根源的な経験の位相における自他分節としての否定へ開かれた。事例 D では、自他の間に境界を作る否定にとどまっている状態から、根源的な経験の位相において他者を否定しつつ自他の否定的表象を把握する過程を経て、根源的な経験の位相における自他分節としての否定へ開かれた。

以上の詳細な分析をふまえ、第 8 章・第 4 節では総合的考察がなされ、心理療法における他者経験と否定のはたらきについて包括的に捉える概念図が示され、その要点が記述された。それによれば、クライアントとセラピストは自他未分化な融合的な場を共にするが、その根源的な次元において自他分節する否定が生きられることで各々独立した存在として生起する。自他分節としての否定は、クライアントによるセラピストの表象の否定、セラピストとかかわることや関係に没入することの否定を契機として生じる。また、クライアントが日常生活において他者を否定する経験や他者に否定される経験も、それを通してクライアントに自他の分節を経験させる契機となる。セラピストがクライアントの認知行動や在り方を検討すること、そしてクライアントやセラピストが自身の経験について言語化・対象化することも自他を分節する契機となる。このように、心理療法では、クライアントは、多様な位相における他者経験をセラピストと共有しながら、自他未分化で融合的な場に触れ、そのような根源的な場において自他分節を経験し、新たな自己イメージや主体的自己へ開かれる。

最後の結論では、第 1 節で本論文の概要、第 2 節で研究成果と臨床心理学への寄与、第 3 節で研究の限界と今後の課題が示された。

## 2. 本論文の審査結果

本学大学院の博士論文評価基準に基づいて検討した結果、審査委員は本論文について以下のように評価した。

### (1) 研究課題設定の適切性

従来の心理療法論においては、クライアントの他者経験というテーマは、認

知行動論における対人認知の修正，力動論における転移の解消といった文脈で主に取り扱われてきた。このような文脈における他者経験では，他者の表象が問題にされることが多いが，最近の精神分析や分析心理学における転移論では，クライアントとセラピストの間に生じる自他未分化な融合的経験からの自他の生起に焦点が当てられるようになってきている。そして，自他融合から自他が生起する際の弁証法的な動きと，弁証法的運動の契機としての否定のはたらきに関心が向けられるようになってきている。本論文の課題は，そのような心理療法論の展開を踏まえてなされており，その意味で課題設定は適切である。

#### (2) 先行研究のレファレンスの的確性

本論文では，心理療法論の範囲を超え，学際的に哲学的な他者論や否定論にも目配りし，広い視野から，他者経験や否定の意義を探っており，先行研究のレファレンスは広範囲かつ的確である。

#### (3) オリジナルな第一次資料に基づく科学的分析

本論文の事例研究で取り上げられているのは，すべて著者自身が行った心理療法事例である。事例は，他者との関わりにおけるアイデンティティ形成が重要なテーマとなる思春期・青年期のものであり，その対象選択は本論文のテーマに合致している。また，取り上げられた事例は主訴・年代の点で多様であり，心理療法がなされた期間も過程の全体を捉えるのに十分である。そして，そのようなオリジナルな一次資料を，質的研究の一技法である SCAT を用いて分析している。ただし，SCAT の選択理由を説明する際，他の質的研究との方法論的比較が不十分であった。とはいえ，分析の手続きの客観性は担保されており，一次資料に基づく科学的分析がなされていると言える。

#### (4) 考察の適切性，結論の合理性・オリジナリティ

事例の考察では，SCAT を用いて概念化を行いつつ，同時に概念化によって抜け落ちてしまう事例の多義性をエピソードの詳細な分析によって補い，さらに，そうして得られた知見を先行研究のレファレンスから得られた枠組みを使って整理するというように，様々な方法を統合的に用いて事例の考察を行っている。また，そうして抽出した各事例の特徴を比較検討することで，心理療法における他者経験と否定のはたらきの多様な位相を包括的に把握する視座を切り開いている。このように，適切かつ合理的な考察を通してオリジナルな結論が導き出されている。

#### (5) 著述の論理性・明解性

一部の用語について概念的検討が不十分なため，定義に曖昧な点が見られたが，全体の論旨の論理性と明確性は損なわれておらず，著述は論理的かつ明解になされていると言える。

#### (6) 口頭試問での発表の明解性，質疑に対して十分な応答

発表は論文の要点を的確に伝えるものであった。主に次の 3 つの質疑についてディスカッションがなされた。① 本論文が提示する 2 次元の座標にプロットされ得ない，融合から自他が生起する動きは十分に捉えられたと言えるか。本論文で主に論じている言語化・対象化といった動き以外に，どのような動き

があるか。② 否定の契機としての他者とは異なる、自己の基盤となり、思いがけない布置によって経験に新たな地平をもたらす贈与としての他者についてはどう考えるか。また、他者受容によって生じる深い身体的な次元での自己の変容、さらに自他の生起についてはどう考えるか。③ 自他融合の瞬間や自他が生起する際にセラピストはどのような経験をし、そのセラピスト自身が自他の生起にどう関係するかといった問題についてはどう考えるか。①について、著者からは、言語化や対象化とは異なる多様な動きがあると思うこと、それらについては今後さらに深く探求する必要があると考えていることが説明された。②③について、著者からは、本論文では十分検討されていないこと、今後さらに探求していくべき課題であることが説明された。その応答は、著者が本論文の限界と課題についての的確に認識していることを示しており、質疑に対する十分な応答がなされたと言える。

#### (7) 博士予備論文審査で指摘された事柄の適切な修正

予備論文審査では、事例選択の理由・代表性などを詳細に説明すること、事例研究に際して SCAT の方法論的限界を吟味しその欠点を補うこと（事例の考察に際して SCAT による概念化によって零れ落ちる事例の動きの多義性も考慮に入れること）などが指摘されたが、それらは適切に修正されている。

以上、審査委員は、(3) (5) (6) で指摘された問題点はあるものの、それらは本論の意義を損ねるものではなく、今後の課題とも言うべきものであるゆえ、森平准次氏の博士論文審査及び試験については、(1) ～ (7) の基準を十分クリアしていると評価し、合格と判断した。